

# サグラダ・ファミリア聖堂聖別式

—2010年11月7日—

鳥居徳敏

それは2010年11月7日午前9時に始まった。この時までには招待参列者6,500人は指定の座席に居なければならない。しかし、スペインのことだから、厳格ではない。というよりも、嚴重態勢のなかでの身元確認のため数箇所の検問を通過する必要があり、指定された道路入口から聖堂に到着するのに約1時間を要す。

時間を守らぬスペイン人たちがほぼ定刻通りに集まったことの方が驚異と言えた。9時25分、国王夫婦が正面玄関に到着する。9時、宿舍の司教館を發った特別仕様の教皇専用車はその主人を乗せ、バルセロナ市街を巡回、25万の市民から熱烈に歓迎される。この宗教心の薄らいだ現代、沿道に集まった若者たちの歓喜、サッカー観戦で響き渡るような歓声や歌声に驚か



図1 サグラダ・ファミリア聖堂、2010年建設状況

される。9時30分、先着の国王夫婦に出迎えられ、特別車は予定通り正面玄関へ。日本の分刻みの行事に負けない正確さで事が始まった。

10時、国王夫婦が正面扉口から身廊に現れると、大拍手が拍子木を打つかのように響き渡り、その中をゆっくり歩き内陣の所定の場所へ移動。枢機卿、大司教、司教の大集団がそれに続き、最後にお供を従えてのローマ教皇ベネディクト16世の登場である。その時、大拍手の合唱は轟音のごとく堂内に響き渡る。内陣奥の中央席に教皇、その両側の内陣外周に沿って高位聖職者たちが陣取り、内陣先端の翼廊に接する側に国王夫婦が控える。翼廊から5廊式身廊部全面に招待

客の座席が敷詰められ、内陣背後の周歩廊と放射状祭室にも座席が用意された。さらに8百人からなる聖歌隊には身廊部外周壁に沿った上階トリビューンに専用の階段席が用意されている。サグラダ・ファミリア聖堂の内部完成記念式典がいよいよ始まったのである。この式典は宗教用語で「聖別式」(dedicación または consagración) と称せられる。

1882年3月19日に着工された聖堂が128年後の今、完成しようとしている。未完とされていたガウディの聖堂が内部のみとはいえ、完成しようとしているのだ。単なる物理的な建物から神の宿る聖堂になるためには聖別されなければならない。目的としての聖堂から現実の聖堂への本質的な転身である。この聖別の式典をローマ教皇自らが執り行った。ガウディ研究者にとって、サグラダ・ファミリアの完成は夢物語であった。同様に、教皇自らがその聖別式を担当するのも夢物語であろう。またしても不可能を可能にするガウディを見る。

式典の様子は映像の提供を託されたカタルーニャ・テレビの60台のカメラを通して国内のみならず、世界1億5千の視聴者に向けて放映された。固定カメラ以外に、伸縮自在の巨大アーム先端に設置されたカメラが要所々々

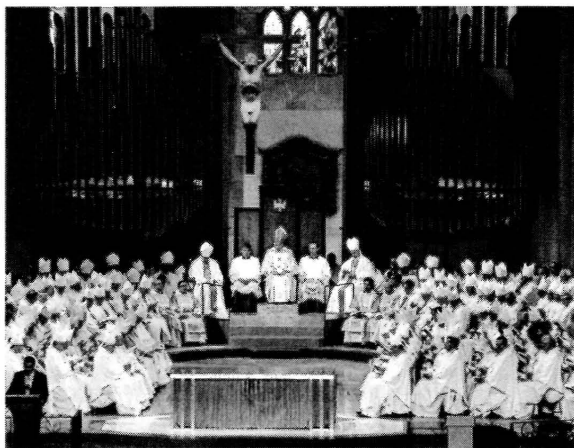


図2 聖別式2010年11月7日、内陣、教皇と聖職者たち

に多数用意された。圧巻は堂内空中をツバメが飛ぶかのように、上下に移動しながら猛スピードで縦断するカメラの存在だ。この映像は低空飛行する飛行体からの撮影のようで、普段決して見ることでできない内観を映し出し、その内観の美しさを魅了させるものとなった。

本稿は、「聖別式」の様相を紹介すること、およびこの式典で明るみに出た諸問題を論ずることを目的とする。

## 1. 聖別式

式典は、キリスト教典礼を専門とする高位聖職者ガイド・マリーニ卿により本式典用にバチカンで編纂された3ヶ国語(ラテン語、スペイン語、カタルーニャ語)版の小型本『教皇ベネディクト16世によるサグラダ・ファミリア教会堂聖別式』<sup>1</sup>に従って挙行された。参加者全員に配布されているから、本を見ながら式典の内容を把握できる。式典は所作と言葉と聖歌で構成され、それらが交互に絡み合いながら進行する。したがって、配布された本には所作の解説、教皇などの述べる言葉、さらには聖歌の楽譜と歌詞とが印刷されており、パイプオルガンで伴奏された聖歌には聖歌隊のみならず、参列者の多くが参加する。式典中は常時聖歌が響き渡り、聖堂はその共鳴箱と化す。ガウディの想定した光景が現実になった。しかし、パイプオルガンは仮設的な設置であり、計画された場所にはない。また、12基のうち8基完成している鐘塔内にも鐘は設置されておらず、ガウディが夢見た鐘の伴奏も実現されなかった。内部の完成とはいうものの、実は未完の部分が多々あり、急ぎ過ぎた完成式典でもある。

この式典で教皇の口から発せられた言葉は、時にラテン語、時にスペイン語、時にカタルーニャ語と適宜変えられていた。前者はバチカンの公用語、後二者はバルセロナを州都とするカタルーニャ州の公用語であり、スペイン語は本国を含め中南米を中心に世界20カ国の公用語である。この言葉の使い分けは、今日の政治的諸情勢を踏まえ、絶妙なバランスをとっていたとマスメディアから絶賛された<sup>2</sup>。

この聖別式は第1部「第1の典礼」、第2部「言葉の典礼」、第3部「聖別と聖油の祈祷」および第4部「聖体の典礼」で構成された。

### 1.1. 第1部「第1の典礼」

第1部は、教皇が正面玄関の大扉を開き、そこから入場するところから始まる。国王、高位聖職者、教皇が内陣の所定の場所に着席すると、この式典の主催者バルセロナ大司教リウイス・マルティナス・シスタク枢機卿が教皇に来訪歓迎の挨拶

---

1 Arquebisbat de Barcelona: *Dedicació de l'Església de la Sagrada Família pel Sant Pare Benet XVI*, Barcelona, 7 de Novembre de 2010, 112pp.

2 Juliana, Enric: "La visita del Pontífice, Catalunya, Roma, Europa", *La Vanguardia* (Barcelona, 2010.11.08), N°.46,366, pp.14-15

拶を述べると、返礼に後者は聖杯と聖体皿を贈る。この後が、第1部の中核となる。

一般の新築では、その依頼主である施主から全権を託された建築家が、施主の意向に従う合法的な建築を計画し、それを建設業者に発注する。業者は、建築家の設計監理の下、計画図面に従い建設する。完成すれば、建築家の審査はもとより、建築基準法や消防法などに適合しているかの審査を受け、使用許可のお墨付きが出てから依頼主に引渡される。この引渡し式が完了した後、工事費の全額が支払られることになる。

第1部の中核はこの引渡し式に相当する。サグラダ・ファミリアの建築家は初代のピリヤール（1828-1903）に始まり、着工翌年の1883年には2代目ガウディ（1852-1926）が就任し、巨匠の死後は3代目スグラニャス（1878-1938）、4代目キンターナ（1892-1966）、5代目プッチ・ブアーダ（1891-1987）、6代目ブネット・ガリ（1893-1993）、7代目カルドゥネー（1929-1997）と続き、現在の8代目は6代目の息子ジョルディ・ブネット・アルマンゴル（1925年生）である。前掲した『聖別式』案内書にはこの部分はこう記されている。

「その（バルセロナ大司教の歓迎挨拶の）後、建設の現主任建築家が教会堂建設に関わる概略を述べる。」

「その後、教皇は教会堂の鍵を同教会堂司祭に引渡す。」<sup>3</sup>

しかし、ここには重要な場面が抜けている。それは主任建築家が聖堂史の概略を説明した後、聖堂の鍵を教皇に引渡すという場面だ。建築家が鍵を引渡す行為は、委託された建築を完成させ引渡すことを意味し、一旦託されたものを本来の所有者に戻す行為である。

この場면을記載しないことに違和感を覚える。恐らく、カトリック教会側はサグラダ・ファミリア聖堂が教会の所有物であることを暗黙に了解させ、自明のことにしたいのであろう。キリスト教聖堂が神の家であるとするなら、神なるイエスから教会の礎に指命された聖ペテロの後継者、すなわち教皇が神の代理人として聖堂の所有者であっても不思議ではない。しかし、理念的にはそうであっても、現実とは異なる。人は理念のみで生きることができないと同様である。サグラダ・ファミリア聖堂のロマンは資金不足との戦いにあり、この戦いに信仰のみを武器に素手で挑戦したガウディの姿勢に育まれた。この戦いでは教会は一度として建

---

3 注1の書『聖別式』、pp.18-19

設資金の調達も援助もすることがなかった。そもそもサグラダ・ファミリアはローマ・カトリック教会の必要性や意思で着工されたものではない。

神に願い事をする信者は無限にいるから、願い事は簡単には叶えられるものではない。神の縁者を介して頼めば、容易に叶えられるのではないか、と書店主ジュゼップ・マリア・ブカベリーヤ（1815-92）は考え、「サン・ホセ帰依者精神的協会」（以下「サン・ホセ協会」と略記）を設立（1866）。サン・ホセとはイエスの父（養父）聖ヨセフを指し、イエスは神であるから、神の父を介して頼めば、願い事は容易に実現されるはず、と考えてのことだ。また、同じ願いであるなら、個人よりも集団で頼んだ方が効果的であろうと考えての協会設立であった。協会は民間団体であるものの、キリスト教徒の集団であるから、教会法に従いバルセロナ司教の認可を取る必要があった。協会の設立とは司教が認可する司教令公布を意味し、それは1866年10月1日のことであった。サグラダ・ファミリアは聖家族、すなわちイエスと母マリアと養父ヨセフで構成され、地上の三位一体とも言われる。サグラダ・ファミリア聖堂とはこの聖家族を御本尊とする聖堂であり、協会の一堂に会しての祈りを目的とした「サン・ホセ協会」本堂の意味を担った。民間団体所有の聖堂とは言え、キリスト教聖堂であるから、ここでも教会の建設許可が必要となろう。ブカベリーヤは2代の教皇、すなわちピウス9世（在位1846-78）とレオ13世（在位1878-1903）からこの許可を得ていた。それ故、起工式（1882年3月19日、聖ヨセフの祝日）は盛大になった。これは地鎮祭に相当するもので、地鎮祭が敷地の地主神を鎮め、工事の無事を祈願するための儀式であるのに対し、キリスト教世界では敷地に神の御加護のあることを祈願する儀式となる。時のバルセロナ司教ウルキオナ卿がこの儀式を執り行い、陸軍少将、カタルーニャ方面司令長官、同方面裁判所長官、バルセロナ地区海軍司令官、バルセロナ市長代理の副市長、ビック司教、および建築学校長など当地の宗教・軍部・司法・行政・教育関連の権威者たちが列席した。「地鎮祭」のことを「鍬入れ」もしくは「鍬入れ式」とも言うように、この起工式でも最初の石材、すなわち礎石が設置される。それ故、起工式のことを「礎石設置式」と呼ぶ。この礎石も司祭者であるバルセロナ司教により設置された。礎石の中には密封された瓶も収納され、その瓶には当儀式を記録した羊皮紙が保管された。この記録には本聖堂の建設はブカベリーヤのイニシアチブ、「サン・ホセ協会」の協力によるも

のと記される<sup>4</sup>。

この「サン・ホセ協会」は66万人という会員数を誇ることもあったが、会員を繋ぎとめる唯一の媒体が機関紙『サン・ホセ帰依の布教』であり、この機関誌の発行は協会設立と同時にメルセス会修道士、後の同会院長ホセ・マリア・ロドリゲス神父(1817-79)にバルセロナ司教より認可されたものであった。したがって、神父は機関紙編集長の立場にあり、ブカベリーヤの顧問として協力した<sup>5</sup>。しかし、協会の唯一の活動が機関紙の発行にあったことを考えるなら、編集長は同時に会長でもあった。この編集長兼会長の役職を除き、協会には執行部の規定がなく、その存在する痕跡も見られない。あるとすれば、ブカベリーヤが代表を務める極めて私的な執行部である。ブカベリーヤが1892年に他界すると、協会は創立者の補佐をしていた娘婿夫婦の手に移った。しかし、この二人も翌年に他界。その子供たちは幼く、後継者は不在、つまり執行部不在の時期が続いた。正にこの時期、巨額の献金が届き、聖堂建設史上もっとも潤沢な時代を迎え、翼廊のファサードである「降誕の正面」の建設に導いた。

この時代の1895年、バルセロナ司教ジャウマ・カタラー卿は協会の窮状を解決する司教令を公布する。この中でサグラダ・ファミリア聖堂の役割を「サン・ホセ協会の本部（協会の揺籃であり、センター *cuna y centro*）」と規定した後、次の8項を定める。

1. 協会会長は学士フェデリコ・ミリャン師とし、司教が任命する信仰面での副会長を置く。
2. ブカベリーヤを後継する「プラ未亡人後継者」書店が出版事業を担う。
3. 必要により司教代理にもなる会長はサグラダ・ファミリア聖堂建設の責任を負い、司教が任命するサン・ホセ協会委員会が会長を補佐し、同委員会メンバーにはブカベリーヤ家の代表が含まれるものとする。
4. サグラダ・ファミリア聖堂建設の管理・運営は、上記委員会に補佐された司教代理に託され、ブカベリーヤ家は聖堂の資金を司教代理に引渡すもの

---

4 "Gloria a Jesús, María y José, alegría del cielo, esperanza de la tierra, terror del infierno", *El Propagador de la Devoción a San José* (Barcelona, abril 1882, 以下 *EL Pro.* と略記する), Año 16, Cuaderno 5, pp.144-57

5 拙論「サグラダ・ファミリア聖堂の建立提案者と初期理念に関する考察」、『日本建築学会計画系論文報告集』（東京、1992年9月）、第439号、111-20頁

とする。

5. 上記委員会は、司教代理である協会会長を委員長とし、同委員会が選出する会計と書記を置く。
6. 上記規定にもかかわらず、司教代理は、建設が順調に進むよう、委員会決定の単なる執行者ではなく、司教の権威を代表するものとして行動しなくてはならない。
7. 協会会長と委員会委員長という立場から、聖堂建設に関わることは同人の承認を得なければならない。
8. 機関紙『サン・ホセ帰依の布教』の出版・編集・販売権はブカベリヤを後継する書店にあり、出版に際しては教会の検閲に受ける。機関紙は聖堂建設への献金を促し、集まった献金は定期的に司教代理に引渡すものとする。
9. 聖堂建設へのすべての献金は安全な場所に保管し、司教代理は定期的に収支決算書を司教に報告し、毎年承認を得るものとする。

この司教令発布の同日、司教は協会委員会を発足させた。委員長は上記のミリヤン氏であり、委員には6人指名され、その中にブカベリヤの建築顧問的存在で、ガウディの師でもある建築家ジュアン・マルトゥレイ（1833-1906）が含まれた<sup>6</sup>。この建築家の仲介によりガウディはサグラダ・ファミリアの2代目の建築家に就任しているのだ。ただし、ガウディは委員会のメンバーではない。なぜなら、委員会は施主であるオーナーに相当し、この委員会が建築家に聖堂の設計監理を委託する形を取るからである。

この司教令にはきな臭さがある。サグラダ・ファミリア聖堂を「サン・ホセ協会」の「揺籃であり、センター」と規定するのは理に適っている。またその会長に初代会長のロドリゲス神父と同じく、聖職者を任命し、委員会の委員長をも兼任させることには問題はないであろう。しかし、この委員長でもある会長が同時に司教代理であり、この代理人に聖堂の資金を引き渡すよう命じているのだ（第4項）。サグラダ・ファミリアを「サン・ホセ協会」の本堂と規定しておきながら、聖堂資金をその会長ではなく、司教代理に引渡せと言うのである。あたかもこの

---

6 “Nós Doctor D. Jaime Catalá y Albosa” (del *Boletín Oficial Eclesiástico*, Barcelona, 14 de Agosto de 1895), *EL PRO*. (Barcelona, 1 septiembre 1895), Año 29, N°.17, pp.446-52

聖堂を司教の資産、すなわち教会の資産にしようとする思惑が垣間見える。ブカベーリャ家から反論が出ぬよう、収益が期待できる著作権を同家に温存させ、同家代表が協会委員会の永久委員になれるよう取り計らっているようにも読める。第8項の「教会の検閲」に関しては、殆どの出版業務が協会員向けの機関紙や祈祷書など宗教に係る出版であるから、妥当な条項と言える。

この時期のカタラー司教による聖堂資金の私物化、すなわち司教区会計への財源譲渡の形跡はガウディ自身の言葉にも認められる。イサベル夫人による巨額の献金が1891年に届き、翼廊のファサード「降誕の正面」の着工が可能になった。この時、聖堂財政を担当していたのがブカベーリャの娘婿のダルマッサス氏であった。ガウディはこう言う。

「それ（降誕の正面を着工させ、聖堂の計画案を最上級のものにしたこと）は聖堂の財政を管理するダルマッサス氏の要請のお陰であり、氏はバルセロナの新司教カタラー卿がその（イサベル夫人の）献金を他の用途に使うのではないかと恐れ、できるだけ早く使うよう私（ガウディ）に言った。」<sup>7</sup>

少なくとも、1895年の司教令では他への転用が可能な規定になっている。事実、イサベル夫人の献金額70万ペセタに対し、建設には約58万ペセタしか投ぜられておらず、約17%の減額が認められるのだ<sup>8</sup>。当時、「サン・ホセ協会」への布施には2種類あった。ひとつは協会創設以来の目的であるバチカンへの財政援助としての布施、もうひとつは聖堂建設資金専用の布施である。前者については、聖堂建設を計画したものの、資金不足で敷地すら購入できなかったことから、教皇の許可を得て、その半分を建設費に回すようになる。後者の布施は他に転用されることなく全額建設に投じられてきた。イサベル夫人の献金は建設資金用であったから、司教が使ったとすれば、それは明らかな転用である。たとえ司教が司教区行政の最高権威だとしても、目的を逸脱する転用は認められるものではない。理念的に可能だとしても、一般信者からは必ず反発されるであろうし、権力の乱用と非難されること必須であろう。それ故、こうした行為は表沙汰にできるものでない。

7 拙書（編・訳・注解）『建築家ガウディ全語録』中央公論美術出版、2007、437頁

8 拙論「サグラダ・ファミリア贖罪聖堂の財政、および財政問題が同聖堂とガウディに与えた影響に関する考察」、『建築史学』（東京、1993年3月）、第20号、54-89頁参照



いずれにしても、こうした歴史的事実からして、サグラダ・ファミリア聖堂は「サン・ホセ協会」の本堂として民間団体の資産であり、カトリック教会の不動産ではないはずだ。だとすれば、聖堂の鍵は教皇にはなく、「サン・ホセ協会」会長に引渡すのが筋であろう。この疑惑付きの鍵の引渡しは『聖別式』案内書に記載されていないのである。

また、先に引用した『聖別式』の解説文「教皇は教会堂の鍵を同教会堂司祭に引渡す」の「司祭」とは誰を指すのか。唯一、可能性のあるのはサグラダ・ファミリア聖堂内に設けられている教区教会堂の担当司祭のことであろう。翌日の新聞報道によると、鍵は「司教区の聖職者に引渡された」と記載されてもいる<sup>9</sup>。新聞報道には誤報がつきものだから、余り信用できないが、この辺の事情については後述することにする。

ただし、「聖別式」という宗教儀式から見た場合、「第1の典礼」の主たる行事は鍵の引渡しではなく、水による聖別にあった。「洗礼」という水で洗う行為は清めとか新生を意味し、キリスト教徒になること、新しい生に生きることを意味する。教皇が新しい聖堂の祭壇と壁面に撒水して清めをする儀式は、単なる建造物を新たに生まれ変わらせ、神のための聖なるものに聖別する意味を担う。すなわち、聖堂が神の家になるための最初のお清めである。

## 1.2. 第2部「言葉の典礼」

第2部は神の言葉の読誦で構成される。ミサ読誦本を会衆に展示し、3人の読師により聖書が朗唱される。一人目は『ネヘミア記』よりモーセの律法を説明・朗読する場面(8, 2-10)を選び、ネヘミアとエズラ、およびレビ人の合唱部「今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。……悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」を朗読して終える。

二人目はパウロによる『コリントの信徒への手紙』から、信者は神の聖堂であり、その土台はキリスト自身であることを解き明かす部分(3, 3-17)を読誦する。

「あなたがたは神の建物なのです。私は、神からいただいた恵みによって、熟練した建築家のように土台を据えました。そして、他の人がその上に家を建てて

<sup>9</sup> Beltrán, J.: "Así se consagró el templo: de la entrega de llaves a la Bula", *La Razón* (Barcelona, 8 noviembre 2010), Año XIII-4,353, Edición Cataluña, p.18

います。ただ、おのおの、どのように建てるかを注意すべきです。イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできません。……あなたがたは、自分の神の神殿 (= 聖堂) であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。神の神殿 (= 聖堂) を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼさせるでしょう。神の神殿 (= 聖堂) は聖なるものだからです。あなた方はその神殿 (= 聖堂) なのです。」

三人目は『ルカによる福音書』より徴税人ザアカイの部分 (19, 1-10) 全文を読む。その最後はイエスの言葉「今日、救いがこの (ザアカイの) 家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子 (= イエス・キリスト) は、失われたものを捜して救うために来たのである。」で結ばれる。

この3つの朗読を序章として、第2部の核心部、すなわちローマ教皇の説教が始められる。今日は神の聖なる祝祭日であり、キリスト教聖堂はイエス・キリストの死を礎石とした信者自身であること、そして、神を自らの家に招くことは、自らの内にキリストを住ませることであり、無限なる愛を目的とする神と同じ生を共有する喜びに浸ることになろうと説き、ガウディの努力と信仰心、また美・信・望で満ちたこの空間、美・真が同一であることを示すこの聖堂を讃える。また、サグラダ・ファミリアが「サン・ホセ協会」に負うことを指摘することも忘れない<sup>10</sup>。この説教の主要部がガウディの心情や考え方をベースに構成されていることにも注目する必要がある。すなわち、キリスト教聖堂というよりも「ガウディの聖堂」としての聖別式であることが前面に出ているのである。

### 1.3. 第3部「聖別と聖油の祈祷」

第3部が聖別式の中核となる。すなわち、神に捧げられたこの場所が、合同礼拝を目的とする救済と許しの家になることを祈祷し、塗油・撒香・点灯することで祭壇と聖堂が聖別される。

先ず、教皇自ら、作業用の肘当てを付け、祭壇上板の中心と4隅に聖油を注ぎ、素手で上板全面を塗油する。これは救世主キリストの象徴である。同時に、バル

---

10 HP: *Con el Papa en la Sagrada Familia, 6-7 de noviembre de 2010*, "Homilias y discursos del Santo Padre: En Barcelona, Discurso 4-A del Santo Padre en Sagrada Familia" <http://www.papabarcelona2010.cat/ca/discursos?lang=es&> (アクセス2010年12月12日)

セロナ大司教とパチカン国務長官の2人の枢機卿と10人の司教、計12名の高位聖職者により、祭壇周辺の十字が切られた壁や柱を塗油する。塗油は、元来、魔除や厄除けを意味する。教皇と12聖職者の塗油により、神の聖堂が12使徒の礎石上に建設されていることを象徴させる。聖油の儀式が終わると、祭壇には香炉が設置され、撒香の儀式がなされる。これはキリストの芳香であり、6人の助祭により身廊部全域に撒香され、キリストが人類救済の生贄になったことを象徴する。最後が点灯の儀式である。修道女たちが祭壇の塗油を拭き取り、その上に聖体拝領用の布を敷く。祭壇は最後の晩餐の食卓（聖餐桌）に変わり、燭台が置かれ、花が飾られる。教皇

は助祭に火を灯した蠟燭を手渡し、こう言う。

「すべての人が誠の真実に入れるよう、教会堂をキリストの光で輝かせなさい。」

祭壇の燭台に火が灯されると



図3 聖別式、教皇による祭壇塗油

同時に、天蓋に照明が入り、聖堂すべての照明が点灯され、光り輝く聖堂に変わる。ここに、聖堂は聖別される。すなわち、神の象徴である光の聖堂に輝く。水、油、香により聖別され、光により命を得る。

#### 1.4. 第4部「聖体の典礼」

第四部は祭壇である聖餐桌にキリストの体を象徴するパンとブドウ酒が用意される。教皇が聖体拝領の祈りを捧げるよう会衆に呼び掛け、祈りの言葉を述べ、会衆は聖歌で応える。祈りが終わると、教皇は会衆全員に平安の挨拶を交わすよう促し、人々はその求めに応じ隣席する人々と握手したり、抱擁したりする。その後、祭壇に用意されたパンが割かれると、教皇はその一片を取り、こう言う。

「これは、世の罪を取り除く神の子羊である。」

聖歌隊が聖体拝領唱を歌うなか、参列者たちは一人ひとり教皇に近づき、聖体を授かる。もちろん、教皇ひとりで 6,500 人に対応するわけはいかないので、その他の聖職者たちもこの任に当たる。聖堂外に設けられた会場でも同様の聖体拝領が行われた。聖体拝領が終わると、その聖体器を聖器室に収め、聖別式は終了する。これで実質的なキリスト教聖堂になったことになる。そして最後、教皇は神が他の聖人たちと共にこの聖堂にいるよう祈る。

しかし、聖別式はこれで終わらなかった。今回はふたつの付録が付いた。ひとつはサグラダ・ファミリア聖堂に「小バシリカ」の誉れを付与するという教皇大勅書をバルセロナ大司教が参列者に示し、それを読み上げたこと。このときは当式典最大の歓声と拍手で沸きあがった。もうひとつは、大勅書読み上げの後、2 人の枢機卿に伴った教皇が、「降誕の正面」前に設けられた特別席に現れ、その前のガウディ広場に集まった聴衆に祝辞を述べ、「アンヘルス」の祈り（天使祝詞＝「アヴェ・マリアの祈り」）をしたことである。大天使ガブリエルがマリアにイエスを身籠ったことを告げる祝辞で始まる「アヴェ・マリアの祈り」は、イエスの「降誕」に捧げられたこのファサードに誠にふさわしく、1982 年前教皇ヨハネ・パウロ 2 世（在位 1978-2005）も同じ場所で同じ祈りをしており、これが今回の前例になっていた。元来は正午 12 時の祈りなのだが、1 時間遅れの教皇の出現となった。したがって、予定時間を裕に 1 時間超えたことになる。この教皇の祝辞の 1 節ごとに若者集団の拍手喝采が起こった。その光景は日本でも超アイドルグループのライブ風景を想起させるものであった。

こうした熱狂的な光景を見ると、それなりの準備がなされていたのでないか、と疑いたくなる。実は、前夜、教皇来訪を盛り上げる集会に参加する機会を得た。それは成熟したキリスト教教育を目的として 1954 年イタリアに創設された『聖体拝領と自由 *Comunione e Liberazione*』<sup>11</sup> の集会であった。世界 70 カ国近くに支部を持つカトリック運動であり、そのバルセロナ支部の集会だ。2 時間程続いた集会は、最初の 30 分ほどはサグラダ・ファミリアを詳細に紹介するドキュメンタリー映画、続いて教皇による聖別式の意義についての説教、さらに聖歌の

---

11 HP: *Comunione e Liberazione*, <http://www.clonline.org/primait.htm> (アクセス 2010 年 12 月 17 日)

合唱訓練、最後は翌日の準備等の伝達で終わった。場所はガウディ作品『サンタ・テレサ学院』(1888-90)に付属して後世建設された講堂であり、400人程度収容できそうなその講堂は、満席で通路まで溢れる盛況ぶりであった。その8割以上が10代後半から20代の若者たちであり、その熱心さは、インドの貧しい若者たちが勉学に取り組む姿勢と寸分変わらぬものであった。これらの若者たちに聖別式の招待券が配布された。ただし、聖堂内ではなく、周辺の広場や道路に準備された会場への招待である。ガウディ広場に集まった若者たちの一部はこうした熱心なカトリック信者に違いない。聖堂内への招待客は、まずは翼廊部を全面的に占めた教区司祭や修道会の聖職者たちで、続いて身廊部の最前列の政界の代表者たち、そしてその背後にバルセロナを中心としたカタルーニャ地方の各教区から15名ずつ選出された信者たちで構成された。

「アンヘルス」の祈りの後、教皇は、聖歌が合唱されるなか、再び堂内に戻り、翼廊から主身廊を通り大正面の扉口に向かっ



図4 聖堂前の教皇専用車到着模様

た。3時間を超える聖別式はここで終わる。再び聖堂外からの歓声が上がった。

実況放送された式典模様は、堂内に入場できない招待者用に用意された聖堂周辺の屋外会場や聖堂近くの闘牛場臨時会場(1万人以上の参加)などの大画面に映し出され、巨大スピーカーを通して教皇の言葉や聖歌を視聴できた。聖堂外の歓声とは屋外招待客の歓声であった。彼らもまた、晴天とは言え決して温かくはない屋外で、待ち時間を含め4時間以上の式典に参加したのである。

## 2. 「小バシリカ」

「バシリカ」とは古代ローマの集会や法廷、さらには商取引などに用いられた多目的の長方形の建物を指す名称である。初期キリスト教の教会堂はこの建築形式を受け継ぎ、バシリカと呼ばれた。後に、長方形の教会堂タイプを指す名称として「バシリカ式」という専門用語も生まれる。帝政時代のローマに建設された

13のバシリカはカトリック世界最初の教会堂とされる。そのうち7聖堂を「大バシリカ」、残る6聖堂を「小バシリカ」とした。「大バシリカ」には教皇専用の祭壇があり、教皇以外のものが使用する場合には教皇の許可を必要とする。現在ローマには4「大バシリカ」のみ残る。すなわち、サン・ジョバンニ・イン・ラテラノ（聖ヨハネ・ラテラノ）大聖堂（313-19年頃）、サン・ピエトロ（聖ペトロ）大聖堂（旧聖堂、330-60）、サンタ・マリア・マジョーレ大聖堂（352-66）、サン・パウロ・フォリ・レ・ムーラ（城壁外の聖パウロ）大聖堂（386）の4大バシリカであり、それぞれ西方教会総司教である教皇の教会堂、コンスタティノポリス総司教の教会堂、アンタキヤ総司教の教会堂、およびアレキサンドリア総司教の教会堂に当たる。それ故、各大聖堂には総司教のローマ滞在時用の住宅が付属していた<sup>12</sup>。したがって、現在カトリックの総本山として教皇が使用しているサン・ピエトロは東方教会総司教の教会堂であったことになる。

他方、「小バシリカ」は現在1500以上を数える。その大部分がヨーロッパにあり、イタリア（約540）、フランス（約170）、ポーランド（約120）、スペイン（114）が上位4国であり、これらだけで裕に半数を超える。バルセロナではサグラダ・ファミリアで9つ目であり、ゴシックのバルセロナ大聖堂も「小バシリカ」である。

「小バシリカ」は、教会堂の古さ、歴史的来歴、あるいは崇敬の中心として認知されていることなどから著名であることを前提とし、唯一教皇によってのみ付与される称号である。例えば、イタリアのロレトは天使によりベツレヘムから運ばれてきたと言い伝えられる「聖なる家」（聖家族の家）の存在で著名であり、サグラダ・ファミリアの最初の計画はこの聖堂のイミテーションであった。また、フランス側ピレネーのルルドは19世紀半ば、聖母が出現し、その指示で「奇跡の泉」が知られるようになり、その後、巡礼地として世界から人々を集めている。このサグラダ・ファミリア聖堂の場合、古くもなければ、由緒来歴があるわけでもない。また信仰の対象として崇められているわけでもない。教皇大勅書によ

---

12 ハードン、ジョン・A（編著）『現代カトリック事典』（浜寛五郎訳）エンデルレ書店、平成4年（3版）。本書（541頁）によると、アッシジの聖フランシスコ教会堂も「大バシリカ」であり、これを加え、現在世界には5堂の大バシリカがあると言う。ただし、他資料は一致してアッシジも「小バシリカ」で、「大バシリカ」はローマの4堂のみと言い切る。

れば、この聖堂が、芸術と信仰・典礼との見事な融合であり、現世での聖都「新エルサレム」の実現であることから「小バシリカ」の称号にふさわしい、とするものであった<sup>13</sup>。極端に言えば、この聖堂は素晴らしい芸術作品であるから「小バシリカ」に指定すると言っているようなものだ。この根拠は、芸術賞の選定理由ならまだしも、キリスト教という信仰と本質的に関わる選定理由とは考え難い。事実、サグラダ・ファミリアは、観光業が日常業務であると言って過言でなく、「小バシリカ」の称号にふさわしい宗教行事の実施が極めて困難な状況にある。

それ故、マスメディアからは、観光と宗教の両立が今後の聖堂に課せられた解決困難な問題だと指摘されている。

近年サグラダ・ファミリアは、マドリードのプラド美術館やグラナダのアルハンブラ宮殿と並び、スペイン最大の入場者数を誇る観光地になっている。別表に見られるように、一昨年は230万と低迷したものの、昨年(2010)は再び250万を超えると推定されている。建設費は入場料で賄っており、一昨年は聖別式を控え建設は急テンポに進み、工事費も1,800万ユーロと高額となった<sup>14</sup>。しかし、入場料は一人10-12ユーロであるから、計算上、年間2,300万ユーロ以上の収入があり、500万ユーロ(1ユーロ110円計算で、5億5千万円)以上の余剰が生まれているのだ。どこも財政状況が悪化している今日、この収入を捨てる手はなく、聖別式の前日も、またその翌日も、サグラダ・ファミリアは観光客を受け入れていた。特に、全国中継された聖別式の翌日は、その内観の素晴らしさに目覚めた地元民が押し寄せ、入場を待つ長蛇の列が聖堂を取り巻くという異常事態が発生した。明らかに、サグラダ・ファミリアは信仰の場である前に、芸術

年	入場者数
1997	991,342
1998	1,092,155
1999	1,222,500
2000	1,420,087
2001	1,554,529
2002	2,024,091
2003	2,057,000
2004	2,260,661
2005	2,376,205
2006	2,534,279
2007	2,839,030
2008	2,731,690
2009	2,312,164
2010	250万以上

聖堂入場者数

13 HP: *Con el Papa en la Sagrada Familia, 6-7 de noviembre de 2010*, "Bula de proclamación de Basílica del templo de la Sagrada Familia" <http://www.papabarcelona2010.at/ca/discursos?lang=es&> (アクセス2010年12月12日)

14 "España - El Papa visita España" (página dedicada a --), *El País* (Barcelona, viernes 5 noviembre 2010), p.14. および HP: *Temple Expiatori Sagrada Família, "Fundación"* [http://www.sagrada familia.cat/sf-cast/docs\\_instit/fundacio.php](http://www.sagrada familia.cat/sf-cast/docs_instit/fundacio.php) (アクセス2010年12月6日)

作品であり、世界遺産でもあり、世界有数の観光地として膨大な入場料を得ているのだ。この聖堂を取って「小バシリカ」に指定したのである。

### 3. 「聖堂 Templo」から「教会堂 Iglesia」へ

着工以来、サグラダ・ファミリアの正式名称は Templo Expiatorio de la Sagrada Familia (サグラダ・ファミリア《聖家族》贖罪聖堂)である。しかし、この度の『聖別式』では Iglesia de la Sagrada Familia (サグラダ・ファミリア教会堂)と記される。「贖罪聖堂」が「教会堂」に変更されているのだが、何故そうなのかを見ることにする。

Templo は礼拝を目的とした建物や場所を指し、神殿、神社、寺院、教会堂など一般には礼拝対象の御本尊を祭る建物を指す。古代エジプトや古代ギリシアなら「神殿」、仏教やヒンズー教なら「寺院」、神道なら「神社」、キリスト教なら「教会堂」に翻訳される。ただし、イスラム教のモスクは偶像崇拝が禁止されているため御本尊を持たず、唯一礼拝を目的とする礼拝堂であるため、Templo とは言わない。西々事典では Iglesia のひとつの意味として Templo cristiano (キリスト教聖堂)を当てているが、教会堂 Iglesia と聖堂 Templo とは必ずしも一致するわけではない。

Iglesia【西】(伊 Chiésa、仏 Église、独 Kirch、英 Church) はギリシア語起源のラテン語から派生した用語であり、「集会」を意味した。初期キリスト教の時代、民間の家屋や邸宅を利用したドムス・エクレシア Domus Ecclesia (集会の家)で聖体拝領を中心とした礼拝や信徒の相談がなされた。しかし、4世紀に入り、ローマ帝国がキリスト教を公認すると、個人所有の「集会の家」は公共の礼拝だけを目的とするドムス・デイ Domus Dei (神の家)に転じ、神聖なる「聖堂」の性格を帯びるようになる<sup>15</sup>。

他方、同じ Iglesia は礼拝する物理的な場所だけでなく、キリスト教徒の総体を指す。この意味では、カトリック教会、ギリシア正教会、あるいは英国国教会などの「教会」に相当する用語であり、さらにはカトリック教会の場合、教皇を頂点とする教会組織を指す。

実は、この記念式典で配布された小冊子『聖別式』には「序」が挿入されてお

15 James, E.O.: *El templo, el espacio sagrado de la caverna a la catedral*, Madrid; Ed. Guadarrama, 1966, pp.281-86 (*From Cave to Cathedral*, London; Thames & Hudson, 1964)



り、Las Iglesias（複数形の「教会」）のタイトルで「教会」を説明しているのだ。その冒頭は次の一節で始まる。

「キリストは、その死と復活により、新たな契約の真にして完全な聖堂 Templo になり（ヨハネ、2 - 21）、神により獲得された民を集めた。徳、および父と子と聖霊の一致により結び合わされたこの聖なる民は、教会 Iglesia（教会法典、4）、すなわち、生きた石で建設された神の聖堂 Templo であり、そこでは霊と真理をもって父を礼拝する（ヨハネ、4 - 23）。」

これによれば、キリストは聖堂、その聖堂にキリスト教徒が集められ、そのキリスト教徒が教会であり、神を礼拝する聖堂であるが、この聖堂はイエスを犠牲にして作られた聖堂でもある、ということになる。つまり、教会はキリスト自身であり、キリスト教集団であり、かつイエスの死により成立した聖堂をも意味する。この最後の意味からすると、「教会堂」は常に「贖罪聖堂」の側面を本質的に持つ。それ故、今回の聖別式では「贖罪聖堂 Templo Expiatorio」に代え「教会堂 Iglesia」にしたのであろうと解釈できる。

しかしながら、これは一般論として述べているに過ぎず、具体的な名称変更の説明として書かれているわけではない。何かしら、触れてはならないものに触れているような気がしてならない。おそらく、サグラダ・ファミリアは特別な聖堂ではなく、他の教会堂 Iglesia と同じく、キリスト教会 Iglesia に属す聖堂であることの宣言、これが本意であろうと推測される。

#### 4. 「代理教区教会堂」から「教区教会堂」へ

1907年、「サン・ホセ協会」委員会創設から12年後、巨額のイサベル夫人の献金が底をついて9年後、マラガイが初めての聖堂賛歌「生まれつつある聖堂」を発表して7年後、同じカタルーニャの大詩人が財政難で建設中断危機にあった聖堂を救出するため「お慈悲のお恵みを！」を公表して2年後、当時のバルセロナ司教カサーニャス枢機卿は、「サン・ホセ協会」会長ミリャン師、同委員で創設者家系のダルマッサス、および建築家ガウディに対し、新しい教区教会堂ができるまでの間、サグラダ・ファミリア聖堂内への代理教区教会堂の設置を依頼する。建設当初、聖堂周辺は野原で住宅はまばらであった。しかし、バルセロナの人口増加にともない、聖堂周辺にも集合住宅が建設され、地区住民も増大した。

宗教心の薄らいだ時代であるから、教会は財源不足で汲々としており、新しい教区教会堂の建設は困難を極めた。そこで、上記の依頼になった。ただし、この要請が筋違いであることをよく承知していた司教は次のようにも述べている。

「どんな些細なことでも、聖堂に不都合を来すものであるなら、そのことを率直に言ってもらいたい。いつでも他の方法での解決策を考えるから。」<sup>16</sup>

サグラダ・ファミリア聖堂への献金は「サン・ホセ協会」本堂の建設のためであって、本来教会側、この場合、司教区が地区住民の礼拝義務を果たすために用意すべき教区教会堂建設のためではない。どこでもある教区教会堂ではないことを承知していたからこそ、司教も丁重な物言いをせざるを得ない。「サン・ホセ協会」会長は同時に司教代理でもあったことを考えると、後述するように、職権上の会長は司教その人であるのだが、聖堂建設の経緯からすれば、司教といえども上記したように依頼するしか他に方法がないのである。

それにもかかわらず、ガウディが他界して4年後の1930年11月20日、新司教が選出されて8日後、司教区事務局長ラモン・バルセイス神父より、「サン・ホセ協会」会長フランシスコ・パレス氏宛てに一通の手紙が届き、「教会法典に則りサグラダ・ファミリア代理教区教会堂は教区教会堂に格上げされた」と告げる。これは本末転倒の由々しき決定である。だからこそ、次のような補足説明を付けざるを得なかった。

「このことは貴委員会構成員の方々を驚かすに違いないでしょうから、司教殿下の名において、次のことを表明しておきます。すなわち、この変更は協会独自の典礼儀式に関わる委員会の正当な権利を何ら妨げるものでない、ということです。かつ、司教殿下は今日当該教区が擁する3万の信徒の礼拝には聖堂の地下礼拝堂では不十分であることをよく承知しており、新しい司祭代理に、購入か賃貸かを問わず、教区聖堂になり得るような十分に収容能力のある他所を探そう指示しております。」<sup>17</sup>

サグラダ・ファミリアでは地下礼拝堂のみが礼拝可能な屋内空間であった。し

16 Dalmases, José María de: *Calendario Josefino para 1927* (Barcelona). 次注の公開質問状 (p.3, nota) からの引用。

17 Martí Matlleu, Juan: *Carta abierta que respetuosamente, en defensa de las obras del citado monumento artístico-religioso, dedica a Rđmo. Sr. Obispo de Barcelona, Dr. D. Manuel Iruvita Almándo, Barcelona, diciembre 1935, pp.2-3*

たがって、代理教区教会堂、および格上げされた教区教会堂も同じ地下礼拝堂に置かれた。この礼拝堂は「サン・ホセ協会」主催の唯一可能な典儀儀式の場所であるから、前者の日常礼拝と後者の特定礼拝とが日時的に重なることもあり、この場合、後者の礼拝は保障され、しかも、教区教会堂の設置も一時的処置であることを明言していることになる。引用文の「新しい司祭代理」は、1907年以來、代理教区の司祭で、ガウディとも親密な関係にあったジル・パレス神父(1880-1936)を退任させての就任であり、後者の解職には何らかの意図が感じられる。事実、さらに5年後の1935年3月、内陣と翼廊部に鉄骨造の仮設大屋根を架ける計画案の存在が発覚する。しかも、この計画はサン・ホセ委員会の関知するものではなかった。この異常事態を認知したのがサン・ホセ委員会の書記を務めていたジュアン・マルティであり、同人は機関紙『サン・ホセ帰依の布教』の編集長も兼ねていたのである。

当然のことながら、マルティはこの動きを阻止すべく行動した。委員会で異議を唱え、司教側の意図を明らかにしようとした。しかし、彼も解職され、聖堂に関わるすべての役職を失い、内部から正す道を奪われる。かくして、1935年12月、司教宛での公開質問状を発行することになる<sup>18</sup>。

この質問状の趣旨は、既述したように、第一に、サグラダ・ファミリアは「サン・ホセ協会」の本堂(本邸 casa solar)であって、教区教会堂の類でないこと。聖堂建設への布施は本堂建設への献金であって、地域の教区用ではないこと。事実、そうした疑念が献金者の側にあり、寄付を拒む人も出現していること。したがって、代理教区教会堂ならまだしも、新規の教区教会堂であってはならないこと。第二に、内陣と翼廊に鉄骨造の仮設大屋根を架ける計画は、聖堂建設の続行を断念し、教区教会堂への転用を意味するのではないのか。その根拠に、ガウディにより集められた巨額献金が温存され、工事作業員と工事が削減されていること。ガウディ他界後、主任建築家が不在であること。第三に、1895年の委員会構成員は正副会長を除き、民間人であったにもかかわらず、現会長は補佐司教、会計も司教区で役職に就く聖職者、さらに副書記が当該教区の司祭代理で、書記のマルティの解職により、書記職を代行する。民会団体「サン・ホセ協会」委員会が司教区聖職者で占められていること。この最後の指摘は、聖堂建設資金流用

18 前注17の公開質問状(全48頁)を指す。

の恐れを暗黙に示唆するものとなろう。

質問状に対する回答書の記録は存在しない。しかし、同年同月の委員会で聖器室の着工を決定し、翌1936年1月の機関紙にその着工準備に入ったことを公表する<sup>19</sup>。だが、同年7月スペインの内戦(1936-39)が勃発したため、聖器室は着工されずに建設は中断し、マルティによって提起された問題もうやむやのまま忘れ去られた。

この異常事態は当時の社会情勢とは無縁ではない。1929年の世界恐慌に象徴されるように経済状況は最悪であり、1931年には第2共和制が樹立してスペイン王制は消滅する。カトリックが国教ではなくなつた結果、教会への経済支援はなくなり、教育でもカトリック教育の理念が放棄され、教会はその影響力は失う。カタルーニャ自治州の州都となつたバルセロナの司教区では、内戦の始まる1936年から1942年まで司教不在の期間が続いたのである。

## 5. 建立母体「サン・ホセ協会」から「建設委員会財団」へ

内戦中、聖堂建設は中断しただけでなく、相当の被害を受け、終戦時には廃墟の様相を呈した。しかし、修復工事が直ちに始められ、1939年10月には地下礼拝堂での宗教行事が可能になった。ただ同礼拝堂の修復には1943年までの4年の歳月を要した。この修復のみならず、後の建設続行を可能にしたのがガウディの遺した備蓄基金であった<sup>20</sup>。また、同年11月「サン・ホセ協会」の機関紙『サン・ホセ帰依の布教』が再刊され、地下礼拝堂の修復工事を報告する<sup>21</sup>。この機関誌は1948年1月号から『聖堂 Templo』に改題しており、修復工事を終えた同年6月30日から新たな部分の建設を再開することを報ずる<sup>22</sup>。機関紙は内戦までは月2回の発行、再刊されてからは月間となり、1983年からは隔月の年6回の発行、しかもカタルーニャ語表記に変更され、機関紙名も同語の『聖堂 Templo』になった。このように改題されても、副タイトルには『サン・ホセ帰依の布教』と入り、『サン・ホセ帰依者精神的協会』とサグラダ・ファミリア

19 “La grandiosa Sacristía de nuestro Templo”, *El Pro.* (Barcelona, 1936.01.15), Año 70, N.º 2, pp.25-28  
20 注5の拙論(1992)参照

21 “La restauración de nuestra cripta”, *El Pro.* (Barcelona, noviembre 1943), Año 78, pp.4-8

22 “Aspectos de nuestro Templo: La reanudación de las obras, 30 de Junio de 1948”, *Templo* (Barcelona, julio-agosto 1948), Año 88, pp.8-9

贖罪聖堂の機関紙」の付記がタイトル下に常に記載されていた。つまり、建設中の聖堂が「サン・ホセ協会」の本堂であることを明確にしていたのである。

しかし、この記載は 1986 年 1 月号から消える。副タイトルから「サン・ホセ協会」の文字が消え、「サグラダ・ファミリア贖罪聖堂理事会の機関紙」に取換えられ、奥付にこの機関誌『聖堂』は『サン・ホセ帰依の布教』を継承する隔月発刊物」であり、発行元は『サグラダ・ファミリア贖罪聖堂建設委員会財団』理事会」と記載される。現在では副タイトルが削除され、この奥付だけとなる。

サグラダ・ファミリアにとって 1986 年 1 月は新たな態勢の出発となった。理事会は機関紙同月号扉頁に「礼讃！—聖堂建設の新段階—」の記事を掲載し、新たな段階に入ったことを告げる。その根拠は、今後 5 年間の 1992 年（バルセロナ・オリンピックの年）までに大部分のヴォールト天井、および「受難の正面」の完成を目指し、主任建築家にジョルディ・ブネットを選出し、現主任建築家フランセスク・カルドゥネー（1929-97）との協働態勢を取ったことに置かれた<sup>23</sup>。したがって、この時点での主任建築家は 2 人であり、前者は 1983 年以來のコーディネーター建築家の役職を兼ねることになる。この年に前主任建築の父リュイス・ブネットがその職を辞任しているから、親から子への継承が表沙汰にならないよう、父の助手であったカルドゥネーを挿入したかのように見える。事実、1986 年を境に後者建築家の存在は忘れ去られる。

真の意味での新段階は「サン・ホセ協会」の名称が機関紙の副題から消えたことと無縁ではなかった。1986 年 1 月 27 日、バルセロナ大司教は「建設委員会財団」の第 1 期理事会メンバーを決定し、会長には聖堂詩人マラガイの息子で政治家のジュアン・アントニ・マラガイ（1902-93）を選出した<sup>24</sup>。ここで注目したいのは、「財団」になったこと、および「第 1 期理事会」という名称が初出していることだ。実は、1984 年 12 月 13 日、時のバルセロナ大司教ジュバニ枢機卿の司教令により建立母体「サン・ホセ協会」は教会法典に基づく財団法人「サグラダ・ファミリア贖罪聖堂建設委員会」に組織変革されていたのである。この変革は当時の会長代理アルネス・ロス卿（1912-85）の要請に基づくものであり、新司教

23 Editorial, "Laus Deo -Nova etapa en la construcció del Temple-", *Temple* (Barcelona, gener-febrer 1986), Any 120, p.3

24 "Primer Patronat de la Funcació «Junta Constructora del Temple Expiatori de la Sagrada Família»", *Temple* (Barcelona, març-abril 1986), Any 120, p.8

令は1895年のものを継承するものとする<sup>25</sup>。この変革要請は前年の1983年に制定された新教会法典に合致する組織改革を求めるものであった。しかし、それ以前の旧法典は長らく慣習法として通用してきたものの成文化として1917年に制定されていた。この旧法典の時も別の司教令が発布されていたのである。これはガウディ存命中の1921年のことであった。

### 5.1. 1921年司教令による建立母体「サン・ホセ協会」

新しい組織に関わる司教令は1921年11月15日に発布された。この冒頭で、1895年の司教令から26年経過しており、時代の変化、教会法典条項、およびブカベリヤ家の要望に対応するために本司教令の発布になったと説明する。その内容は以下の10項目よりなった<sup>26</sup>。

1. 現在サグラダ・ファミリア贖罪聖堂の地下礼拝堂に所在する「サン・ホセ帰依者精神的協会」は次のメンバーよりなる委員会により推進・管理・運営される。

会長、兼司教代理：フランセスク・パレス（バルセロナ司教総代理）

副会長：ジル・パレス（サグラダ・ファミリア代理教区教会堂司祭）

会計：ジュゼップ・マリア・ダ・ダルマッサス（創建者ブカベリヤの孫）

書記：バルナディー・マルトレイ（建築家）

副書記：ジュアン・マルティ（ジャーナリスト、商業高等学校教授）

委員7名：リュイス・カレーラス（聖職者）、ジュアン・リモーナ（画家）、ジュゼップ・リモーナ（彫刻家）、イグナシ・マリア・ダ・ダルマッサス（ブカベリヤの孫）、ジュゼップ・ムンドー（職業不明）、フランセスク・ムンドー（実業家）、ダミアン・マテウ（実業家）

2. 機関紙『サン・ホセ帰依の布教』の編集・発行、および聖堂建設は前掲委員会に託される。
3. 協会の精神的目的の推進において、委員会は全スペイン、およびスイ

---

25 Arquebisbat de Barcelona (Decret-Barcelona, 13 de desembre de 1984), "Estatuts de la fundació «Junta Constructora del Temple Expiatori de la Sagrada Família»", *Temple* (Barcelona, gener-febrer 1985), Any 119, pp.18-21

26 "S.E.I. el Obispo de Barcelona da forma orgánica a nuestras obras", *El Pro.* (Barcelona, 1 diciembre 1921), Año 55, Nº23, pp.265-66

ン語圏に対し、サン・ホセの慈愛、聖家族への礼拝、および教皇への帰依のより一層の促進に努力する。

4. 『サン・ホセ帰依の布教』の発行収益は、今まで通り、教皇庁への納入金と聖堂建設で折半する。
5. 毎年、その他の宗教活動などで得た収益は教皇庁ペトロ献金に納める。
6. 礼拝の維持管理と聖堂建設の継続のため、委員会は献金や布施を集めるよう努力し、毎年収支決裁書を作成する。
7. 教会法典 1523 と 1525 に基づき、司教に前掲収支決算書を贖罪聖堂の建設状況明細書と共に提出し、その承認を求める。
8. これまでの聖堂建設に有効であった技術や監理に関しては、委員会総会と司教に承認されない限り、変更しないものとする。
9. サグラダ・ファミリア贖罪聖堂に「サン・ホセ帰依者精神的協会」と 1907 年設けられた代理教区教会堂とが共存する間は、代理教区聖職者は同時に聖堂専属の司祭、および委員会副会長を務める。
10. 協会と建設に必要と判断される民間の補助要員や、民間委員の退任や辞任などに伴う交代委員は委員会が選出する。

この司教令で明確にされたことは、代理教区教会堂の聖職者が協会本堂の司祭を兼任し、委員会副会長を務めること、また最終決定とその承認は 1917 年制定の教会法典に基づき司教にあることであろう。その他は協会の創設理念に基づき極めて適切と判断される。ただ、2 項の出版関連は、結局、委員会では無理で、次項で見ると、1983 年まではブカベリヤの書店が面倒を見ることになる。

## 5. 2. 1984 年司教令、「サグラダ・ファミリア贖罪聖堂建設委員会」財団

聖堂の創設者ブカベリヤの「プラ未亡人後継者」書店が「サン・ホセ協会」機関紙やそれに付随する書籍等の出版、および建設資金の管理をして来たのだが、1983 年 9 月にこの店も閉店したため、それ以降は、1921 年の司教令の規定に従い書店の全業務は協会委員会に移った<sup>27</sup>。その結果、「委員会」のみが「サン・ホセ協会」の存在を示すものとして残った。こうした実態と同年発布された新教

---

27 "Relleu en l' Administració del Temple", *Temple* (Barcelona, setembre-octubre 1984), Any 118, pp.20-21

会法典に合わせ 1984 年の司教令は作成された。

この司教令は、冒頭説明によれば、「サグラダ・ファミリア贖罪聖堂建設委員会理事会」会長代理により同理事会で合意された規約の承認申請に応じ、かつこの新規約は 1895 年司教令を受け、新教会法典に合致させたものとする。また「サグラダ・ファミリア贖罪聖堂建設委員会」をバルセロナ大司教区の自治的な私法人と規定する。承認された新規約は、カトリック教会法典 116、117、および 1303 条に基づき、全 5 章 18 項目より成った。

第 1 章 1. 名称と法制度、2. 目的、3. 所在地、4. 法人

第 2 章 5. 財団財産

第 3 章 6. 財団の運営、7. 役員、8. 役員の選出、9. 会議と議決、10. 理事会の権限、11. 執行部、12. 高位聖職者（大司教）の権限

第 4 章 13. 財産管理、14. 管理記録、15. 契約

第 5 章 16. 規約の改定、17. 財団の解散、18. 財産の使途

以下が各項の解釈を含む要約である。

1. 名称と法制度：「サグラダ・ファミリア贖罪聖堂建設委員会」は教会法典 116 と 1303 条に基づき、教会特別令により設立される自治的な私法人の財団である。
2. 目的：財団の目的は、ブカベリーヤにより創設され、ガウディにより計画された贖罪聖堂の建設、維持、修復である。
3. 所在地：バルセロナ市マリョルカ通り 401 番
4. 法人：財団は、カトリック教会の私法人である。したがって、あらゆる種類の財産（献金や遺産譲渡などによる財も含む）を獲得・所有できる法的資格を有する。
5. 財団財産：財団の財産は、財団名義の動産と不動産よりなり、献金や遺産譲渡、あるいは公機関や私企業の援助などで増やすことができる。不動産は財団名で登録され、金品は財団名で銀行に保管される。古文書室の書類、図面、写真、図書などは財団、もしくは財団指定の代理人により適切に保管される。聖堂の建設、維持、もしくは修復用に集まった資金は、恒久的な財産に含まれることなく、年次計画に従い投資される。
6. 財団の運営：財団は、理事会により運営される。



7. 役員：理事会は、職権上会長、会長代理、書記、総務、会計、および最低5人の理事で構成される。
8. 役員の選出：職権上会長はバルセロナ大司教で、他の理事を選出する。役員は理事たちの互選により選出される。
9. 会議と議決：理事会は年4回、3ヶ月に1度の割で開催される。
10. 理事会の権限：理事会は財団の運営・管理を賄う。特に、以下の権限を持つ。
  - ▶ 財団の目的に向けられた財源の確保
  - ▶ 財団の年間予算の承認
  - ▶ 財団職員の委嘱と解職
  - ▶ 第三者に対する財団の代表権
  - ▶ 財団の擁護権と代理権を訴訟代理人と弁護士に譲渡する権限
  - ▶ アントニ・ガウディが残した図書、および弟子たちに与えた指示に基づき建設を続行するための一人、もしくは複数の主任建築家の任命
11. 執行部：理事会は本部に3人で構成される執行部を設置できる。執行部の決定は理事会に報告するものとする。
12. 高位聖職者（大司教）の権限：大司教は、教会法典と本規約を犯すことなく、次の権限を有する。
  - ▶ 財団の行動すべてについての視察・検査
  - ▶ 年間予算の最終承認
  - ▶ いつの時点でも予算執行を停止できる権限
  - ▶ 該当する理事と他の理事との接見を前提としての役職停止権と理事解任権
13. 財務管理：理事会は、財団の目的に従い、財務管理をする。
14. 管理記録：理事会には次の運営が託される。
  - ▶ 銀行口座の開設、管理、そして解約
  - ▶ あらゆる種類の財産や寄付の限定承認受諾
  - ▶ 財団職員の委嘱と解職
  - ▶ 動産品の売買
  - ▶ 財団によりなされた前契約の承認
  - ▶ 公的登録所でのあらゆる登録
  - ▶ 公正証書や訴訟要請の対応

15. 契約：売却契約や財団財産に損害を与え得る取引においては、教会法典の定める要件を遵守しなければならない。
16. 規約の改定：本規約は、大司教の決定、または理事会の2／3以上の賛成と大司教の承認により適時改定できる。
17. 財団の解散：財団は、本規約に基づき、あるいは大司教の決定により、財団目的の実現が不可能になった場合には、解散される。
18. 財産の使途：解散の場合、財団の所有する財産は教区教会堂建設を目的として大司教に譲渡される。

この新規約に基づき前掲した第1期理事会メンバーが1986年1月27日選出された。

職権上の会長：バルシス・ジュバニ枢機卿（バルセロナ大司教）

会長代理、兼財産管理：ジュアン・アントニ・マラガイ（政治家）

事務局長（書記、総務、会計）：カルラス・パラグリー

理事11名：リュイス・ブネット（建築家）、アレーナ・カンポー（政治家の娘）、ピラル・フィゲーラス夫人、エンリク・マニョサス、ジュゼップ・リュイス・サガーラ（弁護士）、ジュアン・アルジモン、ジョルディ・ブネット（建築家）、ラファエル・クルミーナス、アウゼビ・グエイ・ジュベ（グエルの孫）、リュイス・モヤ（聖職者）、イシドラ・プッチ・ブアーダ（建築家）

また、同日開催された理事会は上記役職を決定すると同時に、マラガイ、ジョルディ・ブネット、およびアルジモンの3名からなる執行部も設立する。

### 5.3. 司教令に見られる諸問題

1921年司教令は「サン・ホセ協会」の規約であり、この協会の目的の一つが聖堂建設であった。これに対し、1984年司教令は「建設委員会」の規約となり、「サン・ホセ協会」の存在が抹消される。また、会長は大司教代理ではなく、会長が大司教となり、その会長代理が実務上の会長となる。ついに大司教が正面に現れる。そして、委員会の目的は、唯一、聖堂の建設と保存・修復となった。サン・ホセへの帰依や聖家族への礼拝を促す布教活動も、教皇庁財政への援助活動も目的ではなくなり、機関誌の発行すら委員会の義務ではない。それ故、第1期理事会が創設された1986年1月から「サン・ホセ協会」の名が機関誌から消えてい

るのである。

「サン・ホセ協会」の本堂でないとするならば、このサグラダ・ファミリアは一体何であるのか。1984年司教令は「建設委員会」の規約であって、聖堂を規定するものではない。しかし、第10項には「ガウディが残した図書、および弟子たちに与えた指示に基づき建設を続行するため」と記載されており、これからは「ガウディの計画した聖堂」、すなわち「サン・ホセ協会」の本堂の建設であることが読み取れる。このことを前提として次のような一般論が考えられる。キリスト教聖堂はすべてを受け入れる聖堂である、とガウディも言う。かつこの聖堂は聖家族（サン・ホセと聖母マリアとイエス）に捧げられた罪滅ぼしの聖堂でもある。さらに「神の家」でもあり、キリスト教を象徴すると同時に、カトリックの布教、すなわち宣伝にもっとも貢献しているモニュメントのひとつでもある。今回の聖別式に際しても、教皇はこのサグラダ・ファミリアがキリスト教理念を石化したガウディの聖堂であることを強調し、マスメディアもこぞって「ガウディの聖堂」の聖別式として報道した。すなわち、この聖堂は「ガウディの聖堂」であり、ガウディの意図した聖堂を建設することが「建設委員会」の目的となる。

この意味では、ガウディが意図した聖堂が具体的に解明されていなくてはならない。周知のように、ガウディは聖堂の完成図面を残しておらず、また計画中の図面などの貴重な図書や模型類はすべて内戦時に焼失したか、破壊されており、他界した時点での最終案がどうであったのかさえ、推測しなければならない。この意味では、まずはガウディの最終的な意図を解明しなければならない。残念ながら、本規約にはこの解明を目的とした研究に関わる規定が一切含まれておらず、したがって、研究予算が組まれることはなかった。

特に、内部的な完成を見た現時点、研究部署の設置は不可欠であろう。なぜなら、これまではガウディの残した模型を修復することで建設は可能であったが、これからはガウディすら詳細を検討していなかった部分の工事に入るからだ。建設スピードを緩め、研究をベースとした設計の再検討をすべき時期にある。また同時に、ガウディ研究センターの消滅している現在、その研究部署をこのセンターと併設すべきでもであろう。ガウディの存在があればこそ、バルセロナはサグラダ・ファミリアを筆頭に膨大な観光収入を得ている。そうしたガウディ研究センターを持たぬことをバルセロナは恥と思わなければならない。その恩恵を最大限享受

しているこの聖堂は率先して観光収入の一部をこうした研究センターに還元すべきであろう。現在、これを可能にさせる状況にある。また、毎年の莫大な観光収入は教会側に 1935 年のような建設中断を許すことはなく、完成させることのみを要請することであろう。正に本規約は建設を具体化するための規則と言っても過言ではない。

「サン・ホセ協会」の名称が消えたとはいえ、この「建設委員会」財団は法制上前協会を受け継ぐものである。なぜなら、本司教令冒頭で、この財団が既に教会法上認可された機関であり、本規約は 1895 年司教令で制定されたものの継承であるとしているからだ。前述したように、後者の委員会は民間組織の「サン・ホセ協会」の委員会であった。さらに、本規約はその委員会が独自に策定したもので、この認可申請を大司教が認め、司教令として公布したものである。だからこそ、規約第 1 項でこの財団は公法人ではなく、私法人と規定しているのだ。教会法典 116 によれば、教会が設立する機関が前者、それ以外の機関、すなわち民間の機関を後者とし、同法 117 により後者はバルセロナの場合その司教令により認可されなければならない。

にもかかわらず、職権上の会長を大司教と規定している。この「職権上の会長 *Presidente nato*」という本意はただ単に許認可権を持つ職権であろうから、一般にはあり得ない肩書きである。単純に許可する人と許可される人が同一というのはあり得ないし、あってはならない。「会長代理」という無理な肩書は実質上の会長に当たり、マラガイという民間人であることが教会法典上必須となる。これは 1921 年の司教令にはなく、今回初出の規約であり、「自治的な私法人」と規定する限り、その代表は民間人であってしかるべきであるからだ。職権上とはいえ、会長を大司教とする規定は、教会法典に適合しているとは考え難いのである。次に指摘すべき奇妙な個所は第 10 項の「主任建築家」の規定である。なぜ奇妙かという、長は常に一人であるべきところ、「一人、もしくは複数の主任建築家」としているからだ。ガウディの考えに従うことを最大目標としていながら、この部分はガウディの理念に反し、また一般常識にも合致しない。これはジョルディ・ブネット（現主任建築家）をもう一人の主任建築家にするための伏線であったに違いない。さらに不思議なことは、理事会に主任建築家の任命権がありながら、ブネットは親子ともどもその理事であり、現主任建築家のブネット（子）

は理事会執行部を構成する3理事の一人でもある。ここにも任命する人と任命される人が同一人物という違法的な処置が見られる。また、本規約には「コーディネーター建築家」の規定は見られない。にもかかわらず、前掲したように、ブネットは1983年に「コーディネーター建築家」になり、それから3年後には主任建築家にもなっているのだ。このブネット氏親子は論者に好意的で、常に親切で愛すべき人々なのだが、この辺の事情は人を納得させるものではない。

そして最後の項である。現在サグラダ・ファミリアには1930年以來の教区教会堂が設置されている。余所に適当な場所を見つける努力をすればいいながら、今日まで何もせずに教区教会堂が存続しているのだ。1921年の司教令では代理教区教会堂についての記載があった。しかし、本規約では全く触れられていない。にもかかわらず、委員会解散の暁には、聖堂に集まる巨額の献金は教区教会堂建設を目的として大司教に譲渡される、と規定しているのである。

現在の聖堂完成予定はガウディ死後100年の2026年である。今の建設状況からすると不可能な数字ではない。完成すれば財団の任務は聖堂の保存と修復だけになる。その時には財団の解散ということもあり得よう。サグラダ・ファミリアの入場料は単なる入場料ではなく、入場料寄付 *entrada donativo* と規定されている。すなわち、この入場料は即サグラダ・ファミリア聖堂建設のための浄財であり、前述したように、現在では建設費以上の入場料が集まっている。さらに、聖堂完成後は莫大な入場料寄付金そのものが余剰金にもなろう。この余剰金をどうするのか。教会側は教会運営資金に当てたいに違いない。そのための伏線として第17 - 18項の記載となったのであろうが、解散後の規定は唯一解散時の財産処理の扱いのみであり、その使用目的は元来のサグラダ・ファミリア聖堂の建設ではなく、教区教会堂建設のためだという。一見道理があるように見える。しかし、これでは筋が違うのではないか。1935年のジュアン・マルティの司教への公開質問状が思い出される。サグラダ・ファミリアへの献金はバルセロナ大司教区管轄の教区教会堂建設のための浄財ではないということ。なぜなら、サグラダ・ファミリアは永遠に完成しないからだ。今回でも内部の完成と言いながら、解決されていない未完の部分を多々残している。その理由は現在の建築家たちが完成させるための研究もしていなければ、その能力も持っていないからだ。2026年の完成といえども、現状からすれば、形だけの未完の完成になるであろう

うことは間違いない。この聖堂の建設は永遠に続く、それ程、未解決の部分を多く残している。したがって、この聖堂を完成させるためには、建設よりも、先ずは研究が急を要し、上記したようにそのための研究センターを創設すべきである。

## 6. 鍵の引渡し

次に、1. 1. 第1部「第1の典礼」で問題提起した鍵の引渡しについて考えることにする。

1895年の司教令でも、また1921年のそれでも、内容は「サン・ホセ協会」委員会の規定であり、サグラダ・ファミリアは協会の本堂と想定されていた。しかし、1984年司教令に基づく現規約では、「サグラダ・ファミリア贖罪聖堂建設委員会」財団は教会法典に基づく自治的な私法人であり、ガウディ聖堂の建設・維持・修復を目的とする組織とする。そして、この財団の資産として同聖堂が存在する。前述したように、この段階で「サン・ホセ協会」が抹消され、協会員の存在は等閑視された。この財団は公法人ではなく、私法人である。すなわち、大司教が創設し教会が運営する財団ではなく、民間人が組織する民間の財団であり、教会により認可されたものに過ぎない。この民間財団の資産が本聖堂であるから、この聖堂は教会の財産ではない。したがって、鍵の引渡しはローマ教皇にではなく、建設委員会財団の会長になさなければならない。同財団の職権上の会長はバルセロナ大司教であるとするものの、これは違法であり、名目上に過ぎず、実質の会長は常に民間人でなければならない。それ故、財団初代会長（1986-93）は政治家のマラガイ、2代目（1993-99）は弁護士のジュゼップ・リュイス・サガーラ、3代目（1999-2005）も同じく弁護士のジュアン・ジョルディ・バルゴス、そして4代目（2005-）が現会長の政治家ジュアン・リゴール・イ・ロッチ（1943年生）氏になった<sup>28</sup>。したがって、鍵は聖堂所有者代表である財団会長に引渡すのが筋

28 HP: *Temple Expiatori Sagrada Família, "Fundación"* [http://www.sagradafamilia.cat/sf-cast/docs\\_instit/fundacio.php](http://www.sagradafamilia.cat/sf-cast/docs_instit/fundacio.php) (アクセス2010年12月6日)。ちなみに、現理事会は下記のメンバーよりなる。職権上会長、大司教リュイス・マルティネス・シスタク枢機卿；会長（代理）、政治家ジュアン・リゴール氏；副会長、大聖堂参事会員（高位聖職者）ジュゼップ・マリア・アラゴネス卿；書記、ジュアキマ・アレマニ夫人；会計、ペラ・アレグリ氏；委員、ジュアン・リュイス・バルゴス氏（前会長）、ジョルディ・ブネット氏（現主任建築家）、ミケール・ボスク氏、エレナ・カンポー夫人、アリアス・カンブ氏、マリア・カルーリャ夫人、ジュアン・グエイ氏、ジュアン・マタボスク氏、ルゼ・マラガイ夫人、およびジュアン・ウリアック氏の10名。

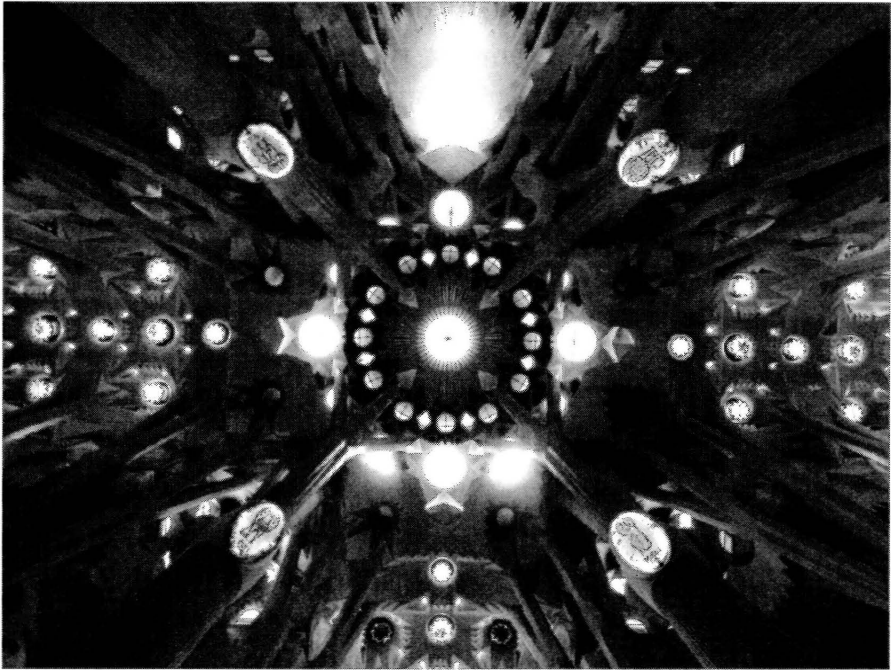


図5 サグラダ・ファミリア、交差部ヴォールト天井、下部身廊部側、上部内陣側

であった。

それがローマ教皇に引渡された。それ故、『聖別式』案内書にこの部分を記載できなかったのではないのか。さらにこの鍵は、同『聖別式』案内書の記載通り、ローマ教皇の手からサグラダ・ファミリア「教会堂司祭に引渡す」はずであった。これは、神の代理人である教皇が「神の家」である教会堂の鍵をその堂内での典礼・儀式を託された司祭に引渡すことを意味するに違いない。しかし、この段階では聖堂は未だ聖別化されておらず、したがって、「神の家」にはなっていないから、教皇が鍵を引渡すべきでない。さらに、新聞報道にあったように、実際はサグラダ・ファミリアの司祭、すなわち同教区教会堂の司祭ではなく、「司教区の聖職者に引渡された」。この聖職者はセルジ・ゴルデウ師であり、バルセロナ大司教区事務局長の役職に就く聖職者なのだ<sup>29</sup>。サグラダ・ファミリア聖堂の地下礼拝堂に

29 この司祭の役職等の情報は、サグラダ・ファミリア聖堂の現補佐建築家ジョルディ・ジャウリによる。

は1930年以來現在も教区教会堂が設置されている。1921年の司教令では同教区司祭は「サン・ホセ協会」本堂の司祭を兼任すると規定されていた。「教会堂司祭」というのであれば、この司祭に鍵を引渡すべきであった。実は、この司祭はリュイス・ブネット（1931年生）師であり、聖堂の6代目建築家リュイス・ブネット・ガリの息子、すなわち現8代目建築家の弟でもある。鍵の引渡ししが兄から教皇、教皇から弟という可笑しい図式にならなかったことは不幸中の幸いと言うべきであろうか。

この矛盾に満ちた鍵の引渡ししが、現在のサグラダ・ファミリアの状況象徴している。先ず、「ガウディの聖堂」としてのサグラダ・ファミリア、2つ目に、「教区教会堂」としてのサグラダ・ファミリア、そして、今回教皇の誉れに与った「小バシリカ」としてのサグラダ・ファミリアである。<sup>サグラダファミリア</sup>聖家族は地上での三位一体とも称される。このサグラダ・ファミリアの三相も三位一体なのか。最初の相は世界遺産としてのサグラダ・ファミリア、第2相は地下礼拝堂に設置された教区信者の日々礼拝用教会堂であり、観光客に開放されていないから、両相の棲み分けは明快で混乱することはない。ところが、第3相は本堂そのものであるから、第1相と重なり混乱が起きる。

この混乱を作り出した張本人の現大司教マルチネス・シスタク枢機卿は、「礼拝・典礼の儀式を開催せず、有料にて観光客にのみ開放」と明快に答える。しかし、これでは人を納得させることができない。止むを得ず、聖別式から40日後の12月18日（土）サグラダ・ファミリア「小バシリカ」で司祭ゴルドウ師による初ミサが開催された。当然ながら、入場料なしで参加できる。結果、普段は訪問することのないカタルーニャ人が殺到し、入場できたのが約6,000人、2,000人以上が道に溢れ大混乱を引き起こす。今度は街区の地元民が「自分たちが入れない」と怒り出す始末だ。もちろん、訪問者の主要目的はミサへの参加ではなく、テレビ中継された素晴らしい堂内を無料で見ることにあった。これでも明らかなように、大司教の頭では「小バシリカ」の司祭が大司教区事務局長であり、建築家の弟は教区教会堂の司祭として棲み分けされていたのである。誠に非常識というか、本人のみが理解できるような分け方だ。それ故、「サグラダ・ファミリアで結婚したければ、二つの方法がある。一つはゴルドウ師の『小バシリカ』で、もう一



つはバルゴス師の教区教会堂で」と揶揄される<sup>30</sup>。

## 7. 結語

常々、サグラダ・ファミリアの現状は尋常ではないと感じていたのだが、本稿により、その異常さが相当に明らかになったと思われる。その最たるものは、世界遺産としてのサグラダ・ファミリア聖堂、地区住民礼拝のためのサグラダ・ファミリア教区教会堂、そしてサグラダ・ファミリア「小バシリカ」の三者共存という不自然な実態である。

元来、この聖堂は聖ヨセフへの帰依を推進すること、すなわち信仰心を育むことに使命が置かれた。この本質面では、多くの観光客が訪れ、聖堂の配置や構成、彫像群とか、建築装飾とかのシンボルや意味を理解すればするほど、本来の目的が達成されていることになる。未完とはいえ、サグラダ・ファミリアは既に本来の目的を達成しているのだ。

地下礼拝堂に教区教会堂を設けるのは、サグラダ・ファミリアの使命とは全く無関係な教会側の身勝手な処置であり、当時の司教たちが表明したように、余所への移転が可能になったら直ぐにでも撤退すべきものである。そして、今回の「小バシリカ」という称号だ。これも教会側の身勝手な行為と言わざるを得ない。前記したように、「小バシリカ」に指定されても何もできないのである。1984年ガウディ建築が世界遺産に登録され、2005年にはそれが拡張され本聖堂も登録され、その評価は不動のものとなる。しかし、教会建築であるにもかかわらず、教会がこの聖堂にコミットすることは余りにも少ない。完成していないのに聖別式という完成式典を急いだり、あるいは内実の伴わない「小バシリカ」という外面だけの勲章で聖堂を飾らせたりしたのは、そうしたコミットを急ぐ気持ちの現れであろう。また、マルティネス・シスタク枢機卿による大司教在任中の功名づくりであったと穿った見方すらできよう。

---

30. HP. Oriolt: *Desde los últimos bancos*, “¡La que ha liado Sistach en la Sagrada familia! (28/12/2010) [http://www.germinansgerminabit.org/ultimos\\_bancos/ultimos2010.htm](http://www.germinansgerminabit.org/ultimos_bancos/ultimos2010.htm) / HP. *La Vanguardia.es* / *Cartas*, “Visitar la Sagrada Familia (cartas 21/12/2010)” <http://www.lavanguardia.es/participacion/cartas/20101221/54091857995/visitar-la-sagrada-familia.html> / HP. *Forum Libertas.com (Diario Digital)*, “Sagrada Familia: ¿cuatro gatos? (Cartas de los lectores, 22/12/2010)” [http://www.forumlibertas.com/frontend/forumlibertas/noticia.php?id\\_noticia=18799](http://www.forumlibertas.com/frontend/forumlibertas/noticia.php?id_noticia=18799) (アクセス 2011年2月6日)

すでに述べたように、サグラダ・ファミリア贖罪聖堂は永遠に未完である。今回の堂内完成式典が敢行されたにもかかわらず、その内部には未完の部分が数多残されている。外観を含めた総体の完成には無数の未解決部分が残されているの  
は言うまでもない。なぜなら、大正面ファサードのデザインを含め、ガウディ自身、  
設計を完成することがなかったからだ。これから先、未解決部分が続出し、建設  
を急げば、現状のように未解決のまま建設だけが進み、将来に問題を山積するだ  
けになろう。この内実を知る人であれば、建設を急ぐよりも、先ずはできるだけ  
多くの主要未解決部を解決し、計画案の完成を目指すべきと考えるであろう。「ガ  
ウディの聖堂」の建設を目的としている以上、具体的な設計部署以外に、ガウディ  
が描いたであろう聖堂を解明すべく研究部署を開設し、そこと協働し建築計画を  
具体化すべきである。前記したように「ガウディ研究センター」の創設が強く望  
まれる。

これまでのサグラダ・ファミリアは芸術・建築分野での研究対象であり、最近  
では観光対象の側面が抜きんできてきた。しかし、本式典はこの聖堂をカトリック  
教会に取り戻し、教会組織がすべてを牛耳ろうとする宣言のようにも見える。前  
教皇ヨハネ・パウロ2世も1982年サグラダ・ファミリアを訪れている。この年  
開催された聖堂着工百年祭式典ではわれわれガウディ研究者は最前列に招かれ  
た。しかし、バルセロナ大司教が組織した本式典ではわれわれ研究者の招待席は、  
聖堂建設にかかわってきた人々同様、内陣背後の周歩廊にあった。誠に些細なこ  
とでありながら、この一つを取っても現大司教を筆頭とする教会側の思惑が垣間  
見えるような気がする。